

幼児の、う、その研究

黒 瀬 艶 子

○幼児の、う、その罪のない、う、そ、

子供は正直なものであるとは、よく申しますが、子供のいふ言葉はまたなか／＼あてにならぬことが多いものです。先達もあるお母様が「うちの子供はこのごろ大變虚言をつくようになりました。ちつともいふことがあてになりません。宅では誰もうそを教へるものがありませんのに、どうした事でせう。あれでは行く先が案ぜられます。蝶々がとんで居もしないのに『母さんー、ホーラ僕の手の中に綺麗な蝶々があるよなど』申します。本當に困つてしまひます」とひどく心配してお話になるのです。かういふことは子供の心の發達の道程に必ずおこることです。我々大人の考へるような、故意な、道德的な、うそではありません。三四歳のころから小學校へ行く頃までの、幼児の發達を考へて見ますと、ことにも五歳頃になつて想像の盛な時期になれば、子供が夢の

様なことを言つたり爲たりするのは何の不思議もありません。次に幼児のいふうその場合を少しあげて見ませう。

○遊戯の上にはあらはれるうそ、

幼児が何々ごつこといつてする遊びは、事實といふ事を標準にすれば、うそに相違ありません。兵隊ごつこをする、商賣ごつこをする。または椅子にまたがつて「お馬どう／＼」といつたり木片をかついで鐵砲のつもりになつたり、布團を背負つて「ねんねんよ」と赤坊をおぶつたつもりになつたり、これらは皆、幼児のつよい想像から來るもので、罪のないうそであります。子供が木の葉や紙片をもつて來て「母さんこれ百圓紙幣よ、これを持つて坊のお店に買ひに來て頂たい」といつても誰もうちの子供は紙幣偽造したといつてなげいたり叱つたりは致しません。子供遊びはうそといへば皆うそですが所謂ごつこ

で真似であつてどがめたり罰したり出来ません。

○う、そ、こしらはずにいふうそ、

想像の全盛の時期には幼児はよく晝夢ダイドリームにふけるものであります。夢といへば眠つてゐる時にみるものですが、晝夢とは眼覺めていて見るので、子供にはよくあります、春のしづかな日に縁側に兩足をなげ出して日向ぼつこしながらヒラ／＼と散る櫻をうつとりと見つめてゐる稚兒が何やらわけのわからぬ歌をうたつてゐる時などはこれです。よく幼児がボンヤリしてゐる、ポカンとしてゐると思ふ時がありますが、かうした時に子供は晝夢に耽つてゐる事が多いのです。これも想像のつよいために來ることで、一人子でお友達のない子供が假空的小お友達を想像して話しかけて見たり、とんで居もしない蝶々を眼に見るようにゑがいて見たり、お伽噺からうけたつよい印象がもとになつて、「うちの臺所に昨日大きな熊がノソリ／＼とはいつて來ましたよ」とか「昨日僕大きな／＼飛行機にのつてお月様のところへ行って來たの」など、途方もない事をいふ事がよくあります。かうした事は、皆これうそ、こしらはずにいふうそ、

でさういつて居る當の子供はうそをいつてゐるといふ意識は勿論ありません、それを大人はさもわざといつたといふようにびつくりして「うそ、ばつかりいふ」といつて叱りますが、叱られた子供は何故しかられるのか一向合點がゆきません。それもその筈で夢と現實の區別がついてゐないのですから。

夢といへば、子供は晝夢ばかりでなしに夜分眠つてゐて見た夢を本當と思ひ込んでゐる事がよくあります。夜中に俄かに泣きます。ゆりおこして譯をきくと「今姉さんが私のお人形の頭をむしつた」といふ。「坊はまたねぼけたのね」となだめてもすかしても之を本當にしてきかない。お人形を眼のまへにもつて行つて髪の毛の安全を證明してもまだしばらくは怪訝な顔をしてゐるといふことがあります。嘗つて私の受持つた組の丁子さんがある朝幼稚園に來ると、しきりに私の顔を見つめてゐます。「お早うございませう」。といひながらも何だか袖にまつはつて手ささはつて見たり著物をつゝいてみたりしてゐます。可笑しいと思ひながらもだまつてゐますと「先生生きて居たの？」とさういふ。いよ／＼何の事かわからなくて「どうして？先生はご丈夫よ」と念をおすと

「先生は昨夜虎にたべられたんぢやないの？」と眞面目にききます。はてこれは何か夢を見たに違ひないと思つてだん／＼聞いて見ますと、先生が虎にくはれたので幼稚園の皆とさがしに出かけたけれども見つからなかつた、オイ／＼ないてしまつて、お母さんに叱られたけれど、それでも先生は虎にくはれたと思つて今朝来て見て先生がゐるので不思議でたまらなかつたとのことでした。

この、うそと知らずにいふうそは大抵の子供にあらることで殊に五六歳の頃に多いのです。これを頭から叱かるのは勿論してはなりません、さうかといつて想像の世界に夢見てゐる子供をこちらでおだてるようにしていかにもさうかといふ様に面白がつてきくと、初めはうそと知らずにいつてゐる晝夢の狀態から眼がさめて、しかも、大人がよろこんで聞いてくれるので今度は意識しながらつくりごとをいつて大人を喜ばせようといふようにならないとも限りません。この邊の取扱ひが實際上餘程難しいと思ひます。まづ、あたらずさはらずに返事をする方がよいので、例へば繪本で自動車の衝突を見た子供が、ふと「あのね、今朝おうちのまへで電車と自動車と衝

突したの」といつた時など、それが事實でない事はわかりきつてゐるのに、「さうどんな風に？誰か怪我したの？」などと根ほり葉ほりきかないで「さう、あぶないのね」位にうけながしておけばその子の晝夢もそれでさめてしまふのです。かうしたうそは子供の想像全盛の時期をすぎれば自然に少くなるので心配する事はありません。心配しないでよいばかりでなく、子供が子供らしく、想像の盛んな世界に生きるといふ事は、私共の一生を通じて二度とめづつて來きりつめた實生活から割り出して批判しては可愛相です。

たゞ、時折、このうそと知らずにいふうそを、子供が晝夢にふけるためのうそであるといふことを氣がつかないために、いかにも故意な他人をおとし入れたことのやうに解釋してそのために罪もない子供が叱られてとんだ迷惑をする事があるかと思ひます。例へば、嘗つて私の組の子供にかういふ出來事がありました。

日頃どうも晝夢にふけりやすいK子が、ある秋の末の一日、前日から團栗ひろひに夢中でしたがこの

日も「お早う」と先生に挨拶するなりすぐ裏庭へ行つて團栗を拾つてゐました。歸つて來た時は同じ組のMさんと一緒でしたがK子曰く「今ね、向ふへ行つたらば鳥が居ましたよ。そしてね、カア／＼つてないてゐましたよ。そしてねMちゃん石をぶつけてね、羽根を折つてしまつたの」と。傍のMちゃんは、前掛一杯のドングリをうれしさうにガチャ／＼いはせながら「う、そばかり」と笑つてゐました。K子もそのまま團栗をもつて遊んでゐました。

これはK子がMちゃんを讒訴したのでもなく、ただ團栗をひろつて居た時、鳥が來たこと、そこに腕白ざかりの男の子Mちゃんのこと、これが結びついて嘗つて「おはなし」で聞いた「羽折雀」の出來事を思ひ出してかうしたことをいつたのであると私はこれをきいた瞬間に思ひついたのでした、かういふ場合には「そんなうそをいふものでない」と叱る勇氣もありません。いかにも子供らしい心持にそのまゝ肯定も否定もしないで一緒に團栗をわけてもらつて遊んだのでした。

○つひ云つてしまふ、そう、

これは、大人にも有りがちなことで、たゞ、我々は「つひ、言つてしまつた」で責任をのがれるわけには參りませんが、幼児がこのつひ、言つてしまふうそは、ごく悪氣のない場合が多いのです。お父様の書齋へ遊びに行つて、うっかり鉛筆で大事な本の表紙にグ／＼と渦巻をぬつてしまふ。氣がついて、これは大變と思つてゐる所へ、お父様が這入つて來て恐しい權幕で「坊がしたのだらう」と仰つしやると、つひ、實につひ、「いゝえ僕しらない」といふ。すさまじいお父様の語氣や態度が、子供のかよい心をとおとしてしまふのです。また、これを反對に、お母様のお仕事そばで遊んでゐて、ふと缺が面白くなつて、その邊に一ぱい紙を切り散らしてゐる、お母様がいつてゐらした時、あんまりやさしく「おや／＼、こんなに散らしてしまつて、坊はいつも、いゝ子だ、こんなことをするのはうちの坊やぢやありませんねえ」と仰つしやると「母さんごめんさい」とお詫しようと思ふ氣がつひ何處かへ飛んでしまつて、「ええ、私ぢやないの」といふ。これは、どちらかといへば、大人の方からうそをいふように仕向けるので子供は全くつひいつてしまふのであります。この種類

のことは餘程氣をつけて、かうしたうそをいふ場合をつくらぬ様に致しませんと、これが進んで。

○云ひぬけのうそ

をいふようにならないとも限りません、云ひぬけのうそになると子供だからといつて大目に見のがせなくなりませう。何か失敗をするとうしやうと思つた瞬間に子供はワッと大聲に泣き出す。この時に大人は可愛相になつて、加勢するつもりで「なあに、泣かないでもいゝ、坊がわるいんぢやない、このおてゝ(手)がわるいのだから」などいふ。いはれた子供は、この時に、罪を他に歸するといふ事を、知らず知らず覺えます。一寸臺所へ行つて御馳走を撮む。「あら、いけません」と叱ると「うゝむ、坊ぢやないの、このお口がわるいの」などと早速子供は應用します。つまり大人にいはれたのでそういへばのがれると思ふのです。けれども、いひぬけのうそほどいやなものはありません。私は幼児がかうした態度で出て來る時にいつでも悲しい暗い心持になつてしまひます。いひぬけといふことは弱者のすること、何か氣がどがめる事があるので自己防衛のためにさる手

段です。幼ない頃から、たとひどんな小さな事にも、かうした芽をつくる様にすることはいけません。叱られるのがこわさの言ひぬけは、そこまでに考へる子供の心を察すると可愛相です。これには、よし子供が失策をしてもそれをありのままに云つて、云ひ甲斐のある様な取扱をしてやれば自然いひぬけを考へなくなりませう。今は少くなりましたが、極端な體罰や、おどしをしない様にすることが大切です。何のどがめる氣もなしに子供に接するのに、子供の方からいひわけがましい事をいふと淋しい心になります。ある時、まだ五つにも満たない子が手に綺麗な花をもつてゐるので、何心なしに「綺麗なお花ね」と。いへば「先生これ落ちてゐたのを拾つたのですよ」と。かういはれた私はぞつとするほど暗い心持てなりました。何故「えゝ先生、綺麗でせう？」といつにくれないのかと思ひました。所有慾のつよい時期に、花をとりたい、自分の手にもちたいのは自然のこと、たゞ子供のはいつてならぬ庭であるために、「お花はとらないことにませう」と約束をしておく。ふと取つてしまつて、後から、全く後から、さるのはわるいと氣がついたこの子供の心は何といふ可愛相な

事でせう。ビク／＼してゐる、其の時先生に何といはれても、叱られるところは無理もないので、つひいひぬけを考へ出すのです。私はこの時に無邪氣な子供が罪をつくる様な境遇に子供をおかない様に極力つとめたいと思つたのでした。

私共が不用意なために、子供にいひぬけのう、そを言はせる場合をつくるといふことも有り勝ちなことと思ひます。幼児はまだ道德意識の明らかでない時期にあるのですから、悪いとしたりつゝ初めから口實を考へてするといふよりも、うつかりしてしまつて、どがめられて、びつしりしてその時に突嗟にいひぬけをする事が多いのです。ですから、大人の方から、そのとる態度に氣をつけばう、そをいはずで済む場合が澤山あると思ひます。

いひぬけのう、そは罪のないう、そといふ事は出来ません。これは悪いことをしたらありのまゝにいひぬけがよい子であるといふ事をよくわからせる方が大切で、取扱ひのわるいために、言ひぬけを覺えさせたり之を助長させたりする事のない様に致したいものです。

○いたづらのう、そ

これも、大人の方から教へる場合が多いのです。子供が下うつむいて鉛筆でしきりに繪をかいてゐる。無心なその様子が何ともいへず可愛らしいのでつひ襟元を一寸突付く、子供がふりかへるとかくれてしまふ。今度またすると見つかると、子供は眞面目な自分の仕事を邪魔されたので少々興奮して、「お父さん、いや？」といふと「父さんぢやないよ、天井のチユウ／＼よ」などと免れます。これがまた子供に面白くなつて、所謂からかひになります。「頭にごみがついてゐますよ」といはれて一生懸命拂はふとすると「どうも御苦勞様」などと、いふからかひは、幼稚園で幼児同士面白がりまた先生を笑はせます。

この種類のもものは、罪がないう、そといへばいへませんが、だまかす事をいつの間にか教へるようになりはせぬかといふ心配があります。それ程までに行かすとも、子供をからかふといふ事が彼等を不眞面目にする事はたしかであると思ひます。いつも子供は遊んで居るとよく申しますが、遊ぶそのものが子供の生活なので、やはり眞面目に遊んで

ほしいのです。また子供の本性としては、それこそ私共には考へおよばない程眞面目に遊ぶものです。

それを一寸のいたづらのうそをしてからかふ事をすると、どうしても不眞面目になります。あまりおどけた子供はいやな氣がします。それは、私共大人の行きつまつた心が、子供のおどけに接すれば、氣がかるくもなりますが、子供の生活といふことを考へますと、おどけた子供はたのもしくありません。まして、だます事をしらすく教へるといふ様に導いたづらのうそは餘程慎んだ方がよいと思ひます。私の經驗によると使用人(特に商家などで、番頭や小僧などの多い)の澤山ある家の子供におどけた不眞面目な子供が時々あると思ひますが、これの原因も或はかうした、いたづらのうそを教はる機會が多いためではないでせうか。

○人を喜ばすためのうそ

子供は無頓着で、自我主義で、あたりかまはずふるまふものですが、あれでなか／＼人に喜ばれたいといふ心持のあるものです。案外に名譽心のつよいものです。大勢人の見てゐる所で勢よく走つてゐる

子供がふと轉ぶと仰山に泣きます。膝をうつて痛いからかと思ふと何處もどうもない、實は折角の得意の顔を轉んだために大なしにしたので氣まりがわるくて大聲に泣いたといふことがよくあります。他人、ことに、自分の親しい両親や、兄弟や、幼稚園の先生には喜ばれたいといふ心がなか／＼あります。これは決してわるい意味のものではなくて、自分を可愛がつてくれる人の機嫌のよいのを喜ぶといふ、愛情の發露から來るのです。「母さんのお顔綺麗ね」と、膝に抱つて顔を見つめてゐた子供がいひますと、かういはれた若い母親はこれがうれしくてたまらないので、「坊はい、子ね」と頭を撫でながら、カステラの一片を御褒美に下さる。思ひがけない賜物をうけた坊やはその次には、また母さんをよるこばせて、そしてカステラをといふ順序で、つひまたさうしたことをいふ様になる。時には大勢親戚など集ると若い母さんは坊やを味方にして「母さんのお顔は」など、問ひかけて「綺麗ね」といふ催促をしたりする。いはれた坊やは、この時はさう思はなくともさういつてしまふ。かういふ場合がよくあります。先にうそと知らずにいふうそのところで申しまし

た晝夢の時もこれと同じであんまり調子にのつて聞きますと、人に喜ばれたくてつくりごと、意識しつづいふ様になつてまゐります。

このうそはこれが嵩じると諂ふといふ好ましくないことになりやすいものですから、助長させない様にするのがよいと思ひます。しかし子供は大人の生活のやうに計畫しませんから、初めはお世辭をいふつもりでも何でもないの、これを「お世辭をつかつてゐる」など、大人の複雑な頭から曲解しては可愛相です。ふうわりとした心でその時々を受けとつてうけながして行く方がよろしいと思ひます。とがめだてをしなければならぬ程に子供はその言葉に責任をもつてゐませんから。

○みえ坊のうそ

男の子でも女の子でも、三人五人とよつて話してゐるのに、自慢を爲合ふ事がよくあります。

「僕のうちには大きな自動車があるよ。」

「いくつ？」

「一臺さ」

「たつた一臺？僕のうちには十臺もあるさ。」

「私のうちには簞笥があつてよ。金の持つところがついてゐるのが……。」

「さう、私のうちにもあつてよ金ぢやないの、ダイヤモンドよ」

「僕のお父様は偉いせ、お室ぢう一杯本をもつていらつしやるよ。」

「僕の父様だつてもつと偉いせ、お室ぢうぼつち(ばかり)ぢやないさ、お庭もお臺所も皆本だらけだせ！」

「私のお母様はお背せいがそれはくお高いのよ、お二階の屋根位あるの」。

「あら、私のお母様はもつとくお高くしてよ、天まで届きさうよ。」

だまつて、傍で書いて居りますと、噴飯したい位とりごめもない事を言ひあつて居ります。これは、みえ坊のうそです。ここに、身分の違つた子供が二三人集まると、かういふ自慢がとかく始まりやすいものです。幼稚園などでも一つの組にあまりかけはなれた身分の子が一緒に居ると、とかく豊かでない、家の子がまけまいと思つて途方もないことをいひ出します。この種類のうそは打すて、おくど虚榮心を

つよめることになりはしまいかと案ぜられます。さうかといつて、お互に自慢を爲合つて居るその時に「そんなことをいふものではない」と叱つて見たところですぐにやめるものでもありませんし、しかし、かういふ場合をくりかへすことは勿論望ましい事ではありませんが、私の考へでは、かうした時には、なるべく子供等が他に興味を轉ずる様に面白い遊びを思ひついて、その方に氣をむけさせる事が一番無難かと思ひます。子供は案外、氣の轉じやすいものですから、自慢の言ひあひをする場合をくりかへさない様にして、かうしたうそをいはずにせぬのがよいと思ひます。この點から考へますと、あまり身分の差のある子供が遊び仲間となると兩方のために思はずくない事がありはせぬかと思へられます。

幼兒の所謂うそをいふ場合は先づ以上が主なもの様です。この他に小學校へ行く頃になれば、またいろいろ道徳上に憂慮すべきうそも言ひかねませんが幼兒期には、特別にひねくれた境遇にぞだつた不幸な子でない限り、罪のないうそが多いので、したがつて、うそを言つたと叱られても、何を叱られる

のか當の子供には合點が行かないものです。

幼兒は、その心的發達の上で、想像を盛んにするといふことのために、言ふことが誠にあてになりません。しかし、さうかといつて頭から子供をうそをいふものとして取りあはないといふことは如何にも殘酷なことです。小さいながらもその人格を尊重したいと思ひます。それで、私は

○子供を信じたい

といつも切に思つてゐます、人間が人間を信ずるといふことは、美しいことに相違ありません。たとひ幼なくても、その人格を認めて、信じたいと思ひます。親に疑はれた子供、先生に誤解された生徒はどみじめなものがありますまい。誰も信じてくれなくつても、私共はせめて親なり先生なりには信じられてほしいと思ひます。不良少年になる原因の主なものは、この信じて貰ふ人がないといふやるせない心の淋しさから來て、自暴自棄になるためといふことも聞いて居ります。

まして、幼兒のいふ、一見うそに見える事はその心の發達の上から深く考へて行けば、いづれも、罪

のないものですからこれを、大人の道徳を標準としてとがめてはあまりに可愛相です。よし、また、あの年のゆかない子供が、時に、「自分のためにたくらむうそ」をいつたりするやうな事があらうとも、さういふことになつたのは、その子の境遇が不幸しあはせなためであると考えれば、むしろ同情してやらねばなりません。

罪のないうそを意識もせずと言つて居るのを、大人が「うそつき」だといつて叱りますと、初めは何でしかられるのかわからなくても、段々うそいふことをおしへられて、今度は意識してうそをいふさいふ事にもなります。氣をつけなければなりません。私は嘗つて幼稚園に居りました時に、此の點で随分頭をなやました。一體に幼児がうそいふ言葉を屢々亦平氣でつかふのに先づびつくり致しました。

「先生！誰さんがうそをつきました」とか、先生が一寸子供とした約束をわすれてゐると「先生うそつきね」などと申します。うそいふ言葉を嚴密に考へて見れば、これは道徳上の重大な悪であります。外國では「あなたはうそつきです」といはれたら、その人は大變な恥辱をうけたわけで、また、仲間はずれを

宣告された事になると聞いておりますが、私共は、幼ないころから「うそつき」といふことを平氣で云ひ馴れて居ります。言葉の上の争ひのやうですが、私はたゞ少しでも自分の心やすさのために、組の子供のこどばから、うそいふことをのぞく事に努力したものでした。うそ子供が申しますと、私は、びつくりした顔をして「うそつて大變わるい事です。よ。そんなことは私達はしませんの。皆いゝ人ばかりですもの、それはね、誰さんが間違つたのでせう。考へ違ひをしたのでせう」とか「お忘れになつたのですよ」などと、言ひなほしてやりました。どうも、子供の頭では、何でもことが間違へば、それをうそと思つてゐるやうです。倫理觀の出來てゐない、あの幼ない時期には、さうした意味をもつ言葉をつかはせない方がよろしい様に思はれます。

人格尊重などと申しますと、何だかむづかしくなりますけれども、これからの子供は、小さい時分からしらすくの間まに自他の人格を尊重する心持をやしなつておきたいと思ひます。自分の人格の尊さを充分知つてこそ人の尊重する事が出来るのですから。先達よみました本の中に、ある外國婦人の幼時

回想の話がありました。それに「自分がまだ幼ない頃、母親から小さな箱を貰つた。引出しがいくつかついてゐて綺麗な箱なので、喜んで、これを大切にしまつて置いた。別にその内に祕密なものを入れてあつたわけでも何でもないが、自分のものごいふ感じが強く、誰にもそれに手を觸れさせたくなかつた。ところが、或日母親がその引出しをあけて居た。之を見た自分は、形容し得ない不快と腹立たしさを感じた。何ともいひあらはすことは出来なかつた。あの時の心地は今にあり／＼と思ひ出す。といふやうな事がかいてありました。成程さうだと思ひました。どうも私共は暴君の様に、幼児にふるまひます。勝手に子供のかけてゐるエプロンのポケットに手を入れたりする事があります。子供を信じたいといふ心持はやがて、子供のもつて居るものを犯すまいといふ心にもなりません。

よく、子供の方から、先生の懷に手を入れたり、時計を引っぱり出したりする事もあります。勿論、悪氣があつてするものでも何でもないのですが、幼ない頃から、よい習慣をつけるためには、さうした些細の事も、やさしく「そんなことするのはお母様は大

きらひ」とか「先生はきらひ」とかいつてやめさせた方がよいと思ひます。人の袂や懷に手を入れる事をする子は、自分の懷に他人から手を入れられても平氣で居る子供でそれでは、自分の犯された事に對する不快を感ずるといふ何とはなしの微妙な感じをやしなふ事が出来ません。人を信ずるためには先づ自分を信ずることが出来なければなりませんのですから。どんなに幼ないからと言つても「坊はうそつきだ」といはれたら腹を立てるほどの子供に育てたいものです。うそ、うそ、平氣で言つてこれを常用語にしてしまふのはいけない事と思ひます。

〇二月常會

日本幼稚園協會二月常會は、都合によりまして、臨時休會と致します。